



昭和35年4月、三池闘争中緑ヶ丘桂町の仲間と共に。まだホッパーも静かな時で、桂町分会はホッパー附近の担当だった。



元気な頃の母親ミヨさん。孝さんに付きっきりで看病に明け暮れたが、昭和55年9月70歳で亡くなった。

父と母と子  
の山口県宇部市の出身。トビ職をしていたが、大牟田にきて三川鉱に入社したのは、昭和十八年頃である。

最初は三川鉱に近い大牟田市諫間の借家に住んでいたが、水害で住めなくなり、荒尾市緑が丘桂町の炭鉱社宅に移り住んだ。三交替社員として働いていたが、定年前の昭和三十三年、中学校卒業したばかりの孝さんと一緒に、(当時はその制度があった)退職した。

孝さんは、坑外で働く、三池闘争後、十八歳になり機械工(切羽)いてない部屋があつたんです。

## 原告団レポート

CO患者

受川 孝さん

## 西瓜が好物

「昭和五十五年のはじめ、お母さんのお手元が看護室になってしまったのですが、もう煩惱が移ってしまってお仕事ね」と付添いの下田千鶴さん(六十歳、熊本・松橋町出身)が、スイカを切り、種をとりだし、ひと口やたらべられると小ちぎり語る。

熊本大学附属病院第五病棟四階

# 原告団

遺族・CO裁判、災害責任追及、特集号

第二百十四号

「ハイカが大好物でした。年中、朝は六時前後の起床。食べ物はかく、水分がわりなんです。だけなんでもいい。赤飯、バランス、ど裏返せどこにもない」ですね。ワサビをついたにぎり、三杯酢のハウスのを鶴屋まで買いに行くんです。胃の消化とケインレン防止の粉薬も、味の素といつて、スイカにあぶしてやるんですね。

下田さんは付添いひとり仕事をする内に、木立が姓、ロードの大差鉄が鉢置かれ、ベッドの足もとの天井から、モンチッチやドラエモンの可愛らしいない

壁には八代疊紀の新聞紙の大ボスターが貼ってあり、テレビがついていている。十九年もの闘病生活を続けていたが、孝さんの病室は落着いていた。



## 孝君の一日

眼が動く。チラッチラッと見てはない。

八代疊紀の大ファンで、カセットテープの歌が流れると、顔がほんの少し、毛布の上で小さく絶えずしている。一日中、いつだ

が、「さよなら」をいつと、からだをゆすり、気分をわるくしていた

たかしの「北酒場」が好きになりたが、十時頃に寝る。ケインレンが断続して襲ってくるとき、食べる母さんは熊本市川尻町の出勤して、家計を助けた。

おとなしく、口数の少ない好青年で、職場、隣の仲間は「孝ちゃん、孝ちゃん」といい、可愛いが

られた。映画が好きで、走るもの早くかった。被災前、学校の運動会に地域代表として走り、懇親をひき休んでいた。「もう少し休んだら」といふ声に、「いや、正月の小遣いがほしいから」といつて、出勤しか

らなかったばかりだった。

森田さんは、熊大でのミヨさんと孝さんの写真をさがしながら、小さな家庭の幸せを感じさせていた大災害の記憶を思い出しました。

現在の孝さん。20年のあいだ言葉も出ず、表情に格別の変化もないが、もう青年のおもかげました。疲れよりも、つかつたですね。ボンベをつけ、医者と看護婦さんが車に同乗して、熊大へ行ったのは十二月末でした。

大部屋でした。ボンベがたくわんあります。みんな重態でした。亡くなりました。疲れよりも、つかつた

## 被災十九年、無言の告白

### 小さな幸せ、根こそぎ奪った災害

のが少くなり、それが十日も続んど、目に見えて瘦せてくる。下田さんは心配で、大阪の姉・

父と母と子  
の山口県宇部市の出身。トビ職を

していたが、大牟田にきて三川鉱に入社したのは、昭和十八年頃である。

九月六日、胆のうガンで死亡。

「天領病院に行って驚きました

」「田さんは、自分の死期が間近なことを知っていたらしく、「孝ね。孝君を捜して、病院中歩きま

を一緒に連れていぐ、連れていきたいたい」と、ウワ言のようにいつていた。

魚を洗うみたいに、死体をならべ、ホースで水をかけていくので

すからね。

「おなか、心残りだつたと

しゃうね」と、叔母の森田まさひさんはない。

九月六日、胆のうガンで死亡。さんはない。

七十年の生涯は、人知れぬ苦悩をかかえたまま終った。

孝さんは、娘の栄子さんが大き

い。なかなかある」とができるたがえじでした。

阪にいる。すでに大学生の娘さん

声をあげて行ったりきたり、ごつまづがつて、ウノウンになつて

いる人たちがなべてありました。

はい。

裁判闘争を闘いぬき、大災害の原因と責任を明らかにするまで受

川孝さんは、無言の告発をしてい

がひびいて、地域の人やお母さんが一生懸命押えていました。それから弁当を持って、主人と通つて

いました。疲れよりも、つかつた

たですね。